

## 序 章

### 0.1 語形成と言語学

人間の言語が他の動物の communication system と区別される特徴の一つは言語の “creative aspect” にあると Chomsky は述べているが<sup>1</sup>、語形成はまさにその “creative aspect” をわれわれに明確に示していると言えよう。言い換えれば、新しい単語を作り理解する能力が、新しい文を作り理解する能力と同様、言語能力の重要な部分を占めている。にもかかわらず、音韻論、統語論、意味論に比べて、形態論の一部である語形成はあまり注目されてこなかった。

これは、単語の分析という問題が現代の言語理論の中では “out of fashion” なものとして無視される傾向にあったためである<sup>2</sup>と言われている。従って、生成文法理論で語形成が論じられるようになったのは 1970 年代以降である<sup>3</sup>。

このことは言語学史的にみても言えることである。Kastovsky (1977: 1) は

In the history of linguistics and of the various theories characterizing the development of linguistics, word-formation has always tended to play a rather marginal role.

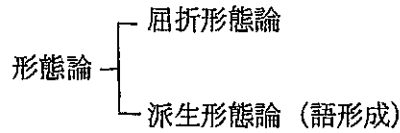
と述べ、言語学の歴史あるいは言語学の諸理論の歴史においても語形成は常に傍役に甘んじてきたと指摘している。また、Adams (1973) は語形成は英語の記述文法の学者からも、一般言語学の分野で研究する学者からも最近まであまり注目されることはなかったとし、その理由を二つあげている。一つは、単語が名前を付与している事物や概念という言語外の世界との関連のため、そしてもう一つは、記述的研究と歴史的研究の中間にあってその地位がはっきりしなかったからであるとする<sup>4</sup>。

このように、語形成研究にとって決して有利な環境にあったとは言えない中において、Koziol (1972), Jespersen (1942), Marchand (1969), Adams (1973), Quirk et al. (1985) などが英語の語形成研究に貢献するような成果をあげている。Koziol (1972) は現代英語を中心としながらも、英語の文献の始まり以来の英語の

語形成を通覧することに重点を置き、資料の配列も歴史的関連が維持されるように記述している。Jespersen (1942) では事例が未整理のまま提示されているが、貴重で豊富な例は有益である。Adams (1973) は体系的な取り扱いをしているとは言えないが、語形成の様々な型について数多くの例が示され興味深い事実の指摘がなされている。Quirk et al.(1985) では多くの適切な例と共に語形成の様々な過程が非常に明確に説明されている。Marchand (1969) は現代の英語で生きた語形成のみを扱う意味では共時的であり、それぞれの型について可能な限り歴史的説明を加えている点では通時的な語形成研究である。それ故に、Marchand (1969) の研究方法は、その副題が示す通り、「共時的・通時的」であると言える。なお、最近の語形成を対象とした研究成果に Fisiak (1985), Sauer (1992), Zbierska-Sawala (1993), Bacchielli (1994) がある。Fisiak (1985) は 1984 年に開催された歴史的意味論および歴史的語形成に関する国際会議で読まれた 30 点の論文を収録している。英語を中心とするインド・ヨーロッパ語族の言語ばかりではなく、朝鮮語、バンツ語、チュクチ半島の言語などを扱った論文も含まれているが、英語の語形成を歴史的観点からみた論文が中心になっており、英語の語形成研究にとって有益である。Sauer (1992) は初期中英語のさまざまなテキストから集めた複合語（主として複合名詞と複合形容詞）の用例をまず形態的基準（構成要素の品詞など）によって分類し、さらにそれぞれの型を統語的・意味的基準に基づいて下位区分する。これにより、Sauer (1992) は複合語の形成は中英語期になるとフランス語の影響で急速に衰えたと言われているが、必ずしもフランス語流入が複合語形成に否定的に作用したとばかりは言えないと指摘している。Sauer (1992) によって集められた豊富な用例は今後の中英語における複合語の研究にとって極めて重要な資料である<sup>5</sup>。Zbierska-Sawala (1993) は Langacker (1987) の認知文法理論に基づいて、主として *Ancrene Wisse* と Katherine Group から用例を収集して、初期中英語の接辞派生を論じている。認知文法理論による語形成研究は現代英語については Górska (1994a), Górska (1994b), Lipka (1996), Mettinger (1996), などがあるが、古英語・中英語の語形成に関する成果はまだほとんど見られない<sup>6</sup>。Bacchielli (1994) は 1993 年にイタリアで開かれた英語史学会での史的英語語形成に関する 23 の論文を収録したものである。古英語から現代英語までのあらゆる時代の語形成をさまざまな側面から論じており、語形成研究にとって極めて有意義な文献である。

## 0.2 語形成と形態論

語形成(word formation)<sup>7</sup> は形態論(morphology)の一部であり、次のように図示することができる<sup>8</sup>。

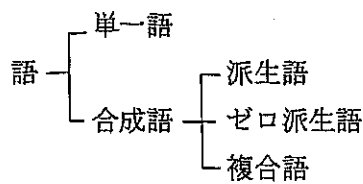


屈折形態論(inflectional morphology)は屈折(inflection)によって生ずる語形変化を扱う分野である。例えば、boys は単数 boy に複数を表す文法的な接尾辞 (あるいは活用接尾辞(inflectional suffix))である -s を付加することによって造られている。また、looked は look という動詞に過去時制を表す接尾辞 -ed が付加されて生じた形である。一方、派生形態論(derivational morphology) は派生接辞(derivational affix) を基体(base) に付加することによって新しい語を生ずる領域と二語 (以上) の語の合成によって新しい語を生ずる複合(compounding)という領域を扱う分野である。例えば、disagreeable の構造は

dis-	+	agree	+	-able
接頭辞		基体		接尾辞

となっている<sup>9</sup>。また、boyfriend は「boy (n.) + friend (n.)」の二語からなる複合語(compound) である。

ここで、語形成において語(word)という場合について触れておく。



単一語(simple word) とは boy, school のように単一の構成要素のみからなる語である。一方、合成語(complex word)は unkindness におけるように un- や -ness のような接辞を付加されて造られる派生語(derivative=derived word)<sup>10</sup>と二つのあるいは二つ以上の単一語が結合されて造られた複合語 (compound) からなる。語形成ではこの合成語が研究の対象であり、単一語は取り扱われない<sup>11</sup>。

### 0.3 分析可能な構成要素

Marchand (1969: 2)によれば、語形成の研究対象は次のように言うこともできる。

Word-formation can only be concerned with composites which are analysable both formally and semantically ... The study of the simple word, therefore, in so far as it is an unanalysable, unmotivated sign, has no place in it.

この引用から明らかなように、Marchand (1969)は語形成においては形態的にも意味的にも分析可能な構成要素のみが取り扱われるとしている。この主張に基づけば Marchand (1969) では deceive, conceive, perceive, receive; consist, desist, insist, persist, resist; conduce, deduce, induce, produce, reduce に見られる con-, de-, in-, per-, re-; -ceive, -sist, -duce のような要素はいかなる意味ももたず、従って記号としての資格を失っており、語形成の研究対象とならないことになる<sup>12</sup>。つまり、deceive, conceive, perceive などは分析不可能な単一の形態素であり意味素なのである。

しかし、このような要素について本論考では意味を有する語よりも小さい形態素の一部として語形成の中で論じることとする。その理由はこのような単位も意味を十分に持っているとは再解釈されて繰り返し使われた場合は新しい語を派生する構成要素と認められると考えるからである。例えば、次の一連の語を見てみよう<sup>13</sup>。

hamburger:	-burger= 'specific dish' → beefburger
lemonade:	-ade= 'drink' → orangeade, pineappleade
cafeteria:	-teria= 'shape' → candyteria, washeteria
Watergate:	-gate= 'political scandale involving the President' → Irangate, nannygate, Paulgate

-burger, -ade, -teria, -gate は最初は何の意味も持たない音素連続にすぎなかったが、その後上に記したような新しい語が創られるようになり、それぞれ 'specific dish', 'drink', 'shape', 'political scandal involving the President' の意味を有するようになった。従って、このような意味で Marchand(1969)が語形成の対象外としている con-, de-, in-, per-, re-; -ceive, -sist, -duce は分析可能な構成要素と

考えてよい<sup>14</sup>。

#### 0.4 クラス I 接辞とクラス II 接辞

現代英語の接辞にはクラス I 接辞(class I affix) とクラス II 接辞(class II affix) の二種類があると言われている<sup>15</sup>。この二種類の接辞はそれぞれ次のような音韻的特徴とそれに関連した特徴を有していることが指摘されている。

(1) クラス I 接辞は強勢の位置決定に関与し、付加されると基体の第一強勢の移動を引き起こしうる。クラス II 接辞は強勢の位置決定には関与せず、付加されても基体の強勢移動を引き起こさない。例えば、

- a. eláctic → elasticity (弾力性)
- b. arránge → arrángement (配列)

a. では elastic という形容詞に -ity という接尾辞が付加され elasticity という名詞が派生されるが、その際第一強勢の移動が生じている。従って、この -ity はクラス I 接辞に属する。一方、b. では arrange という動詞に -ment という接尾辞が付加されているが、第一強勢の移動は見られない。よって、この -ment はクラス II 接辞の一つということになる。

(2) クラス I 接辞は基体または接辞において音変化を引き起こしうるものであるのに対して、クラス II 接辞は音変化を引き起こさない。例えば、

- a. imbalance (不安定) [cf. \*inbalance]
- b. unbalanced (不安定な) [cf. \*umbalanced]

ここでは in- , un-とも「否定」の意をもつ接頭辞であるが、in- + balance → imbalance となり、in- の /n/ が balance の /b/ の前で /m/ と音変化している。従って、in- はクラス I 接辞である。他方、un- は balanced に付加されても /m/ と音変化していない。よって、un- はクラス II 接辞に属する<sup>16</sup>。

(3) クラス I 接辞はクラス II 接辞より「内側」に付加され、その逆にはならない<sup>17</sup>。例えば、

graceless (品のない) → \*gracelessness

-less はクラス II 接辞に属する接尾辞であり、その外側、つまり graceless に -ity を付加して名詞を派生することはできない。-ity はクラス I 接辞に属する接尾辞であるからである。

(4) クラス I 接辞は語より小さい形態素に付加されていると分析されることがあるが、クラス II 接辞は (少数の例外を除き) いつも語に付加される<sup>18</sup>。例えば、

frict-ion (摩擦)

loc-al (地方の)

これらの例で frict, loc は語より小さな形態素である。

(5) 接頭辞だけに見られる特徴として、クラス II 接頭辞と基体とは因数分解関係にある<sup>19</sup>。例えば、

a. pro- and en-clitics (後接ならびに前接語)

socio-linguistics and economics

b. \*ex- and se-cretions

ここで因数分解というのは接辞もしくは基体が共通の場合、共通部分を一つにまとめることができるという意味である。

(6) クラス II 接辞は複合語に付加することができるがクラス I 接辞は複合語には付加されない<sup>20</sup>。例えば、

a. de-upgrade (価値を下げる)

\*dis-upgrade

b. laid-back-ness (気楽なこと)

\*laid-back-ity

以上のような特徴が見られるのは、クラス I 接辞が基体と密接に結びつき、クラス II 接辞は基体からはある程度独立して結びついているからということになる。例えば、(1) の特徴について言えば、強勢の位置決定は語ごとに処理されるが、クラス I 接辞が付加されると基体と密接に結びつき語の中に切れ目がないかのごとくみなされるために、派生語の新しい音韻環境の中でもう一度改めて強勢の位置決定が行われることになる。このような接辞には「+」記号を付けて示す

(例えば、in+, +ity)。これに対して、クラス II 接辞が付加された場合、基体と接辞はある程度独立しているので接辞は基体の強勢に影響を与えない。従って、この種の接辞付加によって強勢移動が起きることはない。このような接辞には「#」記号を付けて示す(例えば、un#, #ness)。

このような特徴はあくまでも現代英語の接辞に見られるものであるが、はたして中英語の接辞にも起こるのであろうか。このことをチャーサーからの例で検証してみよう。

(1) の特徴について：

#### クラス I 接辞

melodye (n.)

And smále fowelēs mákēn *mélódýe*, (CT.Prol. 9)<sup>21</sup>

melodious (a.)

Só wómmánlý, with vóis *mélódióús*,<sup>22</sup> (TC 5.577)

韻律分析(scansion)で示したように、名詞は melodye と強強勢(strong stress)が置かれており、-ous 付加によって派生した形容詞は melodious と強強勢が移動している<sup>23</sup>。従って、接尾辞 -ous はクラス I 接辞の特徴を表していると言える。

#### クラス II 接辞

sorwe (n.)

And lát oure *sórwē* sýnkēn ín thýn hértē. (CT.Kn. 951)

sorweful (a.)

This *sórwefúl* prísónér, thís Pálámóun, (CT.Kn. 1070)

この例では sorwe と sorweful の強強勢の位置は同じであり、sorwe に -ful を付加した後も強強勢の移動は見られない<sup>24</sup>。これは -ful がクラス II 接辞に属する接尾辞だからである。

以上の例から明らかなように、*mélodye* + -ous → *mélódióús*, *sórwē* + -ful → *sórwefúl* となっている。従って、-ous はクラス I 接辞、-ful はクラス II 接辞となる。このような接辞付加と強勢位置の関係は中英語でもある程度観察できるが、チャーサーの作品のほとんどが韻文であることを考える時、強強勢の位置の移動の有無がクラス I 接辞とクラス II 接辞を区別する決定的要因とは言えない。韻文では当然のことながら韻律を整えるために、本来の言語学的な意味での強強勢と

は異なる位置をとることがしばしば起こるからである。例えば、

With that hē séith, I hólde if ferme and stáblē;  
I séye thē sáme, or élles thýng sēmláblē. (CT.Mch. 1499-500)

韻律分析が示しているように、ここでは強勢パターンが *sēmláblē* となっており強強勢は接尾辞 *-able* に置かれている<sup>26</sup>。 *sēmláblē* とならないのは韻律の制約によるものであることは言うまでもない。

(2) の特徴について：

接頭辞 *en-*, *in-* は基体に付加されることにより音韻同化(*assimilation*)を引き起こして、/m, b, p, r/ の前でそれぞれ *em-*, *im-*, *ir-* となる場合がある。例えば、

*embrouden* (v.) [=embroider] CT.Prol. 89: cf. *enbrouden* HF 1327  
*emplastren* (v.) [=gloss over] CT.Mch. 2297  
*immortal* (a.) [=immortal] PF 73  
*impossible* (a.) [=impossible] CT.Fkl. 1549: cf. *inpossible* CT.Mch. 1609  
*importable* (a.) [=unbearable] CT.Mk. 2602: cf. *inportable* CT.Cl. 1144  
*imposicioun* (n.) [=imposition] Bo 1.pr.4.82  
*irreguler* (a.) [=in violation of church law] CT.Pars. 782  
*irreverence* (n.) [=irreverence] CT.Pars. 391

(3) の特徴について：

チョーサーにおいても *\*joyfulness*, *\*smallishity* のような語は見られない。*-ful* および *-ish* の外側に *-ity* が付加されることがないということは、*-ful* と *-ish* がクラス II 接辞に属する接尾辞であり、*-ity* はクラス I 接辞に属する接尾辞であると考えerことで説明できる。

(4) の特徴について：

*eternal* (a.) [=eternal] TC 4.1062  
*liberal* (a.) [=generous] CT.Mel. 1825  
*fraccioun* (n.) [=fraction] Astr. 74

これらの派生語は語よりも小さな形態素に接尾辞 *-al*, *-ioun* が付加されたものである。



(5) の特徴について :

因数分解関係にあたる派生語はまだ中英語では使われていない。

(6) の特徴について :

bakbitere (n.)[=backbiter] CT.Pars. 495

soothfastnesse (n.)[=truth] CT.Cl. 796

これらの例では、-ere が複合語 bakbit の外側に、そして-nesse が複合語 soothfast の外側に付加されている。このような派生が可能なのは -ere および -ness がクラス II 接辞に属する接尾辞であるからである。

以上、現代英語の派生接辞について言われている (1) から (6) の特徴がチョーサーの派生接辞についても言えるか検証した。その結果、(5) の特徴を除いた他の特徴はチョーサーの派生接辞についてもある程度あてはまることが明らかとなった。従って、チョーサーの派生接辞を取り扱う場合も現代英語の派生接辞について言われているクラス I 接辞とクラス II 接辞の分類に基づいて論述してもよいと考える。

## 0.5 チョーサーの語形成に関する研究

Kastovsky (1985) の言を待つまでもなく<sup>26</sup>、英語の語形成の歴史的研究で網羅的になされたものは現在のところない<sup>27</sup>。Dalton-Puffer (1992) は中英語における派生語の研究について、関連した分野である英語語彙におけるフランス借用語の研究に比べて驚くほどその研究が少ないと指摘している<sup>28</sup>。

従って、チョーサーの語形成についても次にあげるもの以外は詳しい研究がなされていないのが現状である。Fisiak (1965) は構造主義言語学に基づき、チョーサーの形態構造を共時的・記述的に論じている。派生接辞には一章が割かれている。ここではチョーサーの派生接辞が品詞を変えることのない接辞（接頭辞と接尾辞）と品詞を変える接辞（接尾辞のみ）に分けて記述されている。この研究によって 83 種類の派生接辞の構造的特徴が明らかにされている。Smith (1971) は Lees (1960) に基づいてチョーサーにおける「名詞 + 名詞」からなる複合名詞のすべてを基底構造 (underlying sentence) を設定することにより分類記述したものである<sup>29</sup>。

上に述べたように、チョーサーの語形成研究はほとんどなされていないのであるが、チョーサーの英語の特質を明らかにするためには、統語論と同様、語形

成についての詳細な調査・分析が重要であることは Görlach (1978)によって指摘されているところである<sup>30</sup>。そこで、本論考ではチョーサーにおける派生語と複合語を主としてその型と生産性に焦点を置きながら論述する。チョーサーの語形成を論ずる方法論的枠組みは、すでに述べたように、主として Marchand (1969)の 'synchronic' な方法論に基づいている。それは、Jespersen (1942)や Koziol (1972)などによる優れた語形成研究があるが、これらの研究では語形成が歴史的観点から様々な基準により分析されており一貫性に欠けるからである<sup>31</sup>。

#### 注

<sup>1</sup> Chomsky (1965: 6) および Chomsky (1975: 4) が指摘しているように、文は理論的には無限に創られ得る。言い換えれば、文には無限の生産性(productivity)があるということである。しかし、語の場合は、語彙化(lexicalization)という問題が多かれ少なかれ関係するため、無限に創られることはない(影山 (1999: 4-5)を参照)。例えば、car salesman (「自動車販売員」と言えるからといって、[big car]<sub>NP</sub> salesman ([大きな自動車]販売員)とは言えない(影山 (1999: 11)を参照)。つまり、自由に新しい複合語を創ることはできないのである。

<sup>2</sup> Matthews (1974: 3) を参照。

<sup>3</sup> 島村 (1990: iii) を参照。

<sup>4</sup> Adams (1973: 3-4) を参照。また、Kastovsky (1971: 3)や Lyons (1970: 96) は構造言語学や生成文法の研究者たちが語形成研究に注意を向けだしたのはごく最近のことであると指摘している。確かに、Siegel (1974), Aronoff (1976), Allen (1978), Selkirk (1982), Spencer (1991) などの研究で明らかのように、語形成が言語研究の中心的課題となったのは極めて最近の現象である。

<sup>5</sup> この他に中英語の頭韻詩における複合語を扱った研究には Oakden (1930 & 1935) がある。

<sup>6</sup> 語形成研究の大きな流れを概観すれば、sign-oriented な研究の代表は Marchand (1969) であり、form-oriented な研究は生成文法理論に基づく語形成研究であり、Allen (1978), Aronoff (1976) など数多くみられる。そして、concept-oriented というべきものは認知文法理論に基づく語形成研究である(Kastovsky (1997: 79-81) を参照)。なお、柴田(1975: 348-96) は Koziol (1937), Jespersen (1942), Marchand (1969), Quirk et al. (1972) を取り上げて、それぞれの語形成に関する記述内容を概観し、その特徴および問題点を詳細に検討している。

<sup>7</sup> Kastovsky (1992b: 356) は語形成を次のように定義している。

“Word-formations are lexical syntagmas based on a determinant (modifier)/determinatum (head) relation (Marchand 1969: 3); ... This holds for compounds as well as for prefixations and suffixations.”

<sup>8</sup> Matthews (1974: 37-41)および Bauer (1983: 33-4) を参照。

<sup>9</sup> 語形成においては、語根(root)、語幹(stem)、基体(base)という用語がよく用いられるので、ここでその相違について触れておく(Bauer(1983: 20-1)を参照)。語根とは語からすべての屈折接辞と派生接辞を取り除いた要素 (singers では sing が語根であり、boyfriend では boy と friend がそれぞれ語根) である。語幹とは語から屈折接辞を取り除いた要素 (singers では singer が語幹であり、boyfriend では boyfriend そのものが語幹) である。基体とは接辞付加——屈折接辞であれ派生接辞であれ——を受ける要素 (singers では -er 付加を受ける基体は sing であり、-s 付加を受ける基体は singer) である。従って、語根も語幹も基体になりうるといえる。つまり、singers について言えば、屈折接辞 -s と派生接辞 -er を除いた残りの要素 sing は語根であり基体でもある。屈折接辞 -s を除いた要素 singer は語幹であるが、屈折接辞 -s が付加されている要素としては同時に基体でもある。

<sup>10</sup> 派生語にはいわゆるゼロ派生による語 (例えば、record (n.) —— record (v.)) がある。

<sup>11</sup> 語形成には他にも逆成 (back formation)、混成 (blending) などがあるが、本論考では上記に示した派生語と複合語のみを取り扱う。語の分類については竝木 (1985: 3-11) も参照。

<sup>12</sup> これに対して、Marchand (1969)は delouse, co-author, perchloride, rewrite などにおける de-, co-, per-, re- は意味を持っているとしている。なお、Marchand (1969: 6) および Kastovsky (1997: 80-2) を参照。

<sup>13</sup> Kastovsky (1997: 82-3)および Marchand (1969: 2) を参照。

<sup>14</sup> Ljung (1975: 476) は Marchand (1969)の考え方について、その問題点を次のように指摘している。

“...a stem like *-duce* in e.g. *produce* ...exhibits predictable graphonemic/phonological variation in all the words of which it is a part: the pattern *produce* —— *productive* —— *production* recurs also in e.g. *deduce*, *reduce*, *introduce*, *seduce*, etc. Similar observations can be made for *-ceive*, *-fend*, *-ply* and many other Latin or Neo-Latin bases.”

また、Chomsky & Halle (1968: 94ff.) は con-, de-; -ceive, -sist のような形態素を純粹に意味を持った形態素と同じ資格を有する構成要素と考えている。生成文法理論が主として form-oriented な考え方に基づいていることを思えば、このような主張は当然のことである。

<sup>15</sup> クラス I 接辞はレベル I 接辞、クラス II 接辞はレベル II 接辞とも呼ばれる。このようなクラス I 接辞とクラス II 接辞の相違は語形成の生産性・規則性の程度をとらえようとする考え方であり、「レベル順序づけ(level ordering)の仮説」と言われている(Siegel (1974: 111-5) および大石(1988: 37-51) を参照)。

<sup>16</sup> 詳しくは Allen (1978: 18-25)を参照。

<sup>17</sup> Aronoff (1976: 53-4) を参照。接頭辞どうしの組み合わせ(例: unenlightened (無教養な))や接尾辞どうしの組み合わせ(例: systematically (体系的に))の

---

場合は「内側」は明白であるが、接頭辞と接尾辞の組み合わせの場合は注意を要する。例えば、unkindness の場合は un- も -ness もどちらもクラス II に属する接辞である。この例では [[un- + kind]<sub>Adj</sub> + -ness]<sub>N</sub> という構造と考えられるので un- は -ness の「内側」に位置している接辞と言える。逆に、uneducated (教養のない) では [un- + [educate + -ed]<sub>Adj</sub>]<sub>Adj</sub> の構造と考えられるので、un- はクラス II 接尾辞 -ed の「外側」に生じていることになる。

<sup>18</sup> hapless (不幸な)、feckless (無能な)、fulsome (鼻につく) などでは -less, -some はクラス II 接尾辞であるが語より小さな形態素に付加されている。クラス II 接頭辞は語より小さな形態素に付加されることはない。

<sup>19</sup> Siegel (1974: 149-50) および 大石 (1988: 49) を参照。

<sup>20</sup> Selkirk (1982: 106-12) を参照。

<sup>21</sup> チョーサーからの引用は Benson (1987) による。また、作品の省略表記は MED に基づいている。なお、// は強強勢を、/x/ は弱強勢を示す。

<sup>22</sup> Nakao (1978: 75) を参照。

<sup>23</sup> ここでは強強勢は第一強勢と同じと考える。

<sup>24</sup> Nakao (1978: 71) を参照。

<sup>25</sup> Nakao (1978: 69) を参照。

<sup>26</sup> Kastovsky (1985: 221) は “A comprehensive history of English word-formation has still to be written.” と述べている。そしてさらに、中英語の形態論的研究 (語形成研究) は “a surprising under researched area” だと指摘している。

<sup>27</sup> 米倉 (1992: 53-4) を参照。

<sup>28</sup> Dalton-Puffer (1992: 465) を参照。

<sup>29</sup> チョーサーの語形成について部分的に言及されているものに Elliott (1974: 161-3), Davis (1974: 80-2), Cannon (1998: 154-7) がある。また、Burnley (1994) はチョーサーを中心とした 14 世紀の英語 (ロンドンを中心に) の語形成の一般的特徴を論じている。

<sup>30</sup> Görlach (1978: 84-5) を参照。

<sup>31</sup> Fisiak (1965: 58-9) を参照。